

ごんぎつね

新美 南吉

—

これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。

昔は、わたしたちの村の近くの、中山という所に小さなお城があつて、中山様というお殿様が、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっばいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入っていもをほり散らしたり、菜種がらの、干しであるのへ火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとん

がらしをむしり取っていたり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨が上がると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空はからっと晴れていて、もずの音がキンキン、ひびいていました。

ごんは、村の小川の堤まで出てきました。辺りの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川はいつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水が、どっとまわっていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、はぎの株が、黄色くにごった水に横だおしになって、もまれていきます。ごんは川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうと草の深い所へ歩きよって、そこからじっとのぞいてみました。

「兵十だな。」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒

衣着物をまくし上げて、腰こしの所まで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網あみをゆすぶっていました。はちまきをした顔の横っちょように、円いはぎの葉が一まい、大きな黒子ほくろみたいにへばり付いていました。

しばらくすると、兵十は、はりきりあみのいちばん後ろの、袋ふくろのようになったところを、水の中から持ち上げました。その中には、しばの根や、草の葉や、くさった木切れなどが、ごちやごちや入っていました。でもところどころ、白い物がきら光っています。それは、太いうなぎの腹はらや、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみといっしょにぶちこみました。そしてまた、袋の口をしばって、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくを持って川から上がり、びくを土手に置いて、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中から飛び出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。ごんは、びくの中の魚をつかみ出しては、は

りきりあみのかかっている所より下手の川の中を目がけて、ぼんぼん投げこみました。どの魚も、「トボン」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれなくなった、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツといって、ごんの首へまき付きました。そのとたんに兵十が、向こうから、

「うわあ、ぬす(ぬすっと)とぎつねめ。」
と、どなりたてました。ごんは、びっくりして飛び上がりました。うなぎをふりすててにげようと思いました。うなぎは、ごんの首にまき付いたままはなれません。ごんはそのまま横っ飛びに飛び出して一生けんめいに、にげていきました。

洞穴ほらの近くの、はんの木の下でふり返ってみましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっと外し

て、穴の外の草の葉の上のせておきました。

二

十日ほどたって、ごんが、弥助というお百姓のうちの裏を通りかかりますと、そのの、いちじくの木のかげで、弥助の家内が、お齒黒を付けていました。かじ屋の新兵衛のうちの裏を通ると、新兵衛の家内が、髪をすいていました。ごんは、「ふふん、村に何かあるんだな。」と思いました。「なんだろう、秋祭りかな。祭りなら、たいこや笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが。」

こんなことを考えながらやってきますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十のうちの前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人が集まっていました。よそ行きに着物を着て、腰に手ぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きななべの中では、何かぐず

ぐずにえています。

「ああ、葬式だ。」と、ごんは思いました。「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

お昼がすぎると、ごんは、村の墓地へ行つて、六地藏さんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向こうにはお城の屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いていました。と、村の方から、カーン、カーンとかねが鳴ってきました。葬式の出る合図です。

やがて、白い着物を着た葬列の者たちがやってくるのがちら見え始めました。話し声も近くなりました。葬列は墓地へ入ってきました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみ折られていました。

ごんはのび上がって見ました。兵十が、白いかみしも着けて、位はいをささげています。いつもは赤いさつまいもみみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおっかあだ。」ごんはそう思いながら、頭を引っこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。「兵十のおっかあは、床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのままおっかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いつつ、死んだんだらう。ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

三

兵十が、赤い井戸の所で、麦をといでいました。

兵十は今まで、おっかあと二人きりで貧しい暮らしをしてきたもので、おっかあが死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。「おれと同じひとりぼっちの兵十か。」こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしの安売りだあい。生きのいい、いわしだあい。」

ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走っていききました。と、弥助のおかみさんが裏戸口から、

「いわしをおくれ。」

と言いました。いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を、道ばたに置いて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持って入りました。ごんはそのすき間に、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十のうちの裏口から、うちの中へいわしを投げこんで、穴へ向かってかけもどりました。とちゅうの坂の上でふり返ってみますと、兵十がまだ、井戸の所で麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

次の日には、ごんは山で栗をどっさり拾って、それをかかえて、兵十のうちへ行きました。

裏口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯を食べかけて、茶わんを持ったまま、ぼんやりと考えこんでいました。変なことには兵十のほっぺたに、かすり傷が付いています。どうしたんだろうと、ごんが思っていますと、兵十がひとり言を言いました。

「いったい、だれが、いわしなんかを、おれのうちへほうりこんでいったんだろう。おかげでおれは、盗人ぬすびととかわれて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた。」

と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。「かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷まで付けられたのか。」

ごんはこう思いながら、そっと物置の方へ回ってその入口に、栗を置いて帰りました。

次の日も、その次の日もごんは、栗を拾っては、兵十のうち

へ持ってきてやりました。その次の日には、栗ばかりでなく、松たけも二、三本、持っていきました。

四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山様のお城の下を通って少し行くと、細い道の向こうから、だれか来るようです。話し声が聞こえます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片側かたがわにかくれて、じっとしていました。話し声はだんだん近くなりました。それは、兵十と、加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助。」

と、兵十が言いました。

「ああん。」

「おれあ、このごろ、とても、不思議なことがあるん

だ。」

「何が。」

「おっかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれに粟や松たけなんかを、毎日毎日くれるんだよ。」

「ふうん、だれが。」

「それが分かるのだよ。おれの知らんうちに、置いていくんだ。」

ごんは、二人の後をつけていきました。

「ほんとかい。」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。」

その粟を見せてやるよ。」

「へえ、変なこともあるもんだなあ。」

それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひよいと後ろを見ました。ごんはびくつとして、小さくなって立ち止まりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさと歩きました。吉兵衛というお百姓のうちまで来ると、二人はそこへ入っていきました。ポンポンポン

んと木魚の音がしています。窓の障子に明かりが差していて、大きなぼうず頭がうつつて動いていました。ごんは、「お念仏があるんだな。」と思いつながら井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど、人が連れ立って吉兵衛のうちへ入っていきました。お経を読む声が聞こえてきました。

五

ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、またいっしょに帰っていきます。ごんは、二人の話の間ごとくと思つて、ついていきました。兵十の影法師をふみふみ行きました。

お城の前まで来たとき、加助が言いだしました。

「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神様のしわざだ

ぞ。」

「えっ。」

と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神様だ、神様が、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしやって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ。」

「そうかなあ。」

「そうだと。だから、毎日神様にお礼を言うがいい

よ。」

「うん。」

ごんは、へえ、こいつはつまらないな。と思いました。おれが栗や松だけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃない、おれは、引き合わないなあ。

その明るる日もごんは、栗を持って、兵十のうちへ出かけました。兵十は、物置で縄をなっていました。それでごんはうちの裏口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔を上げました。と、きつねがうちの中へ入ったではありませんか。こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は、立ち上がって、納屋にかけてある火縄銃を取って、火薬をつめました。そして足音をしのばせて近寄って、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。

ごんは、バタリとたおれました。

兵十はかけよってきました。うちの中を見ると土間に栗が、固めて置いてあるのが目につきました。

「おや。」と兵十は、びっくりしてごんに目を落としました。

「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は、火縄銃をバタリと、取り落としました。青いけむり

が、まだ筒口から細く出ていました。

「ごんぎつね」

※『赤い鳥』版（鈴木三重吉主宰、1931年1月号）の「ごん狐」をもとに現代仮名遣いで表記しました。漢字については小学4年生までの学習漢字を基本とし、学習していない漢字には初出にルビをうちました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。(TEL：0569-26-4888)